

2021

3

spring

つながり

特集 小児アレルギー



薬剤室スタッフ

特集 小児アレルギー



小児科病棟スタッフ

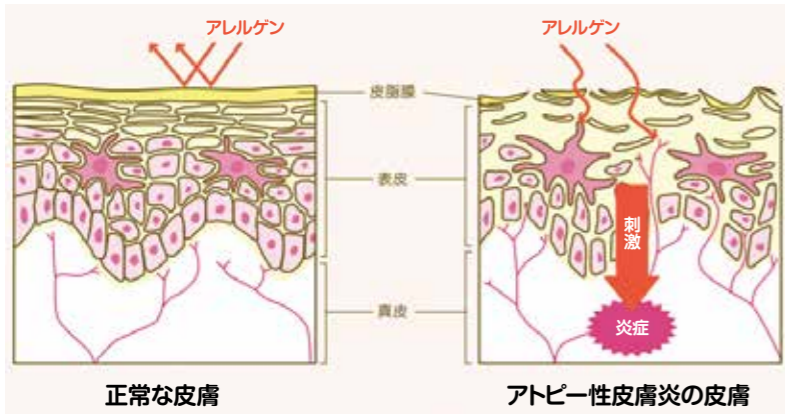


図2 経皮感作の様子

1にアレルギーマーチが続発すると考えられています。皮膚の乾燥・湿疹やアトピー性皮膚炎によるバリア機能の低下によりダニなどの環境アレルゲンや食物アレルゲンへの経皮感作が発生します(図2)。経皮感作とは肌から侵入したアレルゲンを身体が異物とみなし排除しようと免疫物質(「IgE抗体」)が作られることを指します。この経皮感作により様々なアレルギーが進行すると考えられています。

アトピー性皮膚炎

前述のアレルギーマーチの予防・軽減のために早期からのスキンケアが重要です。国内でのアトピー性皮膚炎の患者は4か月児で12.8%、1歳6か月児で9.8%、3歳児で13.2%、小学1年生で11.8%、小学6年生で10.6%と高く、決して珍しくない疾患であることが分かります。また、成長による割合の低下が緩やかであることから、完治することは難しく、ある程度『付き合っていく必要がある』疾患であることも分かります。

つまり、皮膚炎の発症早期から皮膚のバリア障害をケアし経皮感作を抑えることに加え、長期的な視点で治療を継続していくことが重要です。アトピー性皮膚炎の治療は大きくスキンケア(清潔・保湿)、悪化因子の対策(寝不足やストレスなど)と薬物療法に分かれます。

清潔は皮膚に接触するアレルゲンを減らすこととなります(図2)。具体的には入浴や寝具・衣類の洗濯、お部屋の掃除などです。お風呂で石けんを使用する場合は、汚れと一緒に皮脂も落ちますので入浴後には保湿剤も併用してください。保



第一小児科副科長 齋藤 秀憲
第一小児科医員 鈴木 佐和子

アレルギーとは

アレルギーとは免疫反応が特定のアレルゲンに対して過剰に起こることを指します。多くは体質によるもので、アトピー性皮膚炎、食物アレルギー、気管支喘息、アレルギー性鼻炎・結膜炎などの原因となります。重症度は人により様々です。例えば鶏卵の食物アレルギーでも幼児期に自然軽快する方もいれば、まれですが成人になっても摂取困難な方もいます。

そのため必要な治療の強さも患者さんにより異なりますし、長く付き合っていく必要がある患者さんもあります。

湿剤は皮膚のバリア機能を補いアレルゲンの接触による炎症を軽減します。

薬物療法はステロイド(抗炎症薬)外用薬や抗ヒスタミン薬(かゆみ止め)の内服などになります。特に重要となるのが炎症部位を直接治療するステロイド外用薬になります。外用薬による治療には症状が出たときに軟膏を塗るリアクティブ療法と、症状の出る前から予防的に治療するプロアクティブ療法があります。

当院では軽症な患者さんにはリ



図3 年代別症状の現れやすい部位

アレルギーマーチ



図1 アレルギーマーチ

アレルギーは成長により種々のものが発症、増悪、軽快、消失、再発を繰り返すことが特徴のひとつです。それを称して『アレルギーマーチ(アレルギー行進曲)』と呼ぶことがあります(図1)。

- ① アトピー性素因
- ② 乳児湿疹・アトピー性皮膚炎
- ③ 食物アレルギー
- ④ 気管支喘息・アレルギー性鼻炎・結膜炎

アクティブ療法を行い、繰り返す患者さんや重症な患者さんにはプロアクティブ療法を行うようにしています。プロアクティブ療法で予防的に外用薬を使用すると言っても患者さんによって湿疹の出やすい部位や予防に必要な治療の強さが異なります。そのためスキンケアという外用薬の予定表を作成して治療の説明をしています。アトピー性皮膚炎の患者さんの多くは成長と共に悪化しやすい部位が変化していきます(図3)。そのため例えば、乳児には顔に週2回のステロイド外用薬の使用で体は保湿剤のみ、あるいは中学生には肘、膝には週3回ステロイド外用薬を使用し、他の部位は週1回ステロイド外用薬の使用など、具体的な使用方法を提示しています。通院頻度は初診時に皮膚の状態が悪ければ2〜3週間ごととなります。その後は徐々に間隔を伸ばしていき3か月に1回程の受診となります。

家族・お子さん自身が適切に外用薬を用いた症状をコントロールできるようにになればスキンケアなどの細やかな指導は不要になります。自分で症状をコントロールすることが出来る、これがアトピー性皮膚炎の治療目標です。

食物アレルギー

食物アレルギーの多くは離乳食の時期に卵や乳・小麦などで発症します。0歳〜1歳での有病率は8〜9%程とまれな疾患ではなく、むしろよくある疾患と言えます(図4、5)。

乳幼児期に発症する卵、乳、小麦などは成長とともに軽快していく傾向があります(魚類や甲殻類など自然軽快があまり見込めない食物もあります)。ところが一部の重症な患者さんでは中々自然軽快しない方もいます。そういった患者さんには、経口免疫療法が有効である場合があります。これは、食物アレルギーを摂取しても安全な少量から継続して摂取していくことで、体がそのアレルギーに慣れていき、次第に摂取量を増やしても症状が出ないようにしていく治療法のことをいいます。

実際には食物アレルギーを発症した乳幼児期に自然軽快の有無を予想するのは困難です。そのため当院ではなるべく早い時期に食物経口負荷試験を行い、早期の摂取開始を目指しております。

当院では、食物経口負荷試験は入院と外来の二通りのやり方で実施しています。入院負荷試験は金曜日

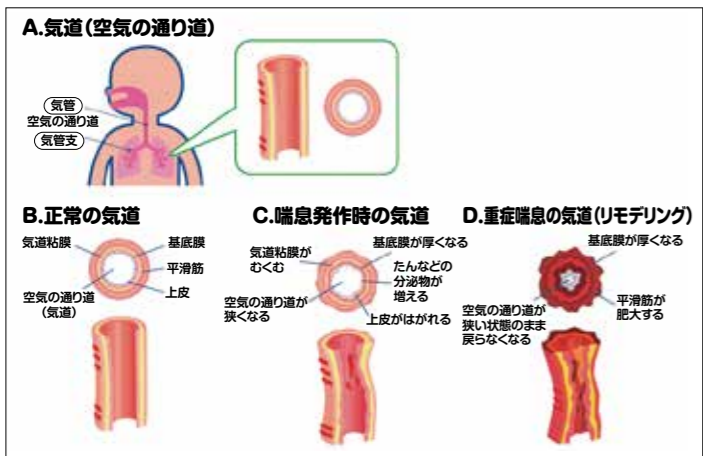


図8 喘息による気道の変化

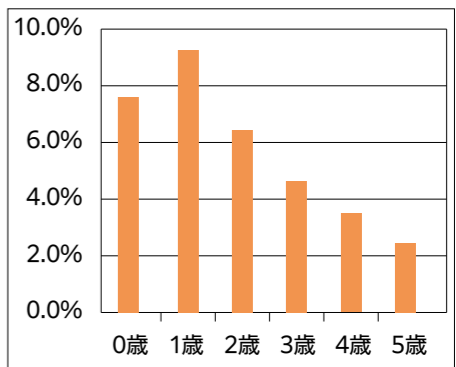


図4 食物アレルギーの有病率

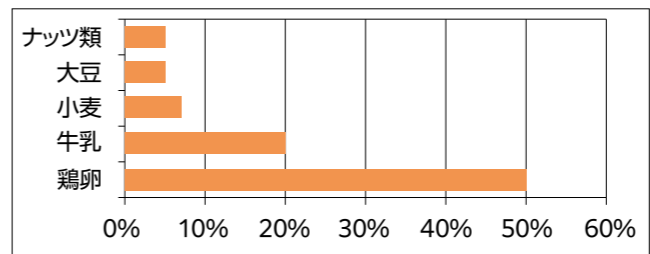


図5 食物アレルギーの原因食物

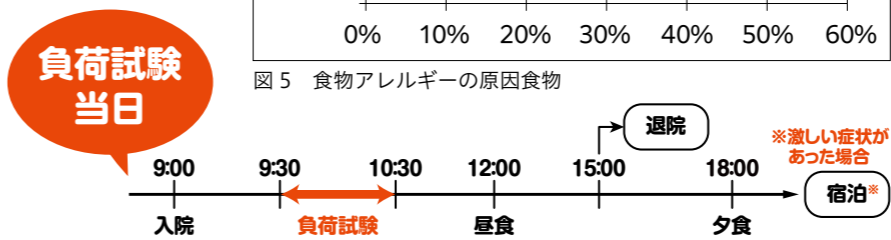


図6 入院負荷試験のタイムスケジュール例

負荷試験当日

最近の研究では、成人になったときに平均で身長が1.5cmほど低い程度のわずかな成長抑制が報告されていますが、発作での入院を繰り返すようなことを防げるわけですから、メリットがデメリットを上回るといえます。

長期管理を継続していても体調や環境の変化で発作が起きることがあります。発作時には気管支を広げる作用のあるβ2刺激薬の吸入や、ステロイドの投与(内服や点滴)を行います。

患者さんの中には喘息なのかどうなのか、治療をするべきなのかどう

補足……………
ステロイド 元々体の中にあるホルモンの一つです。抗炎症作用や免疫抑制作用がありアレルギー分野ではそれらの作用を期待して薬として使用します。
抗ヒスタミン薬 アレルギーに反応して体内でヒスタミンが出てくることで皮膚のかゆみや粘膜の発赤・腫脹が起きます。それらの反応を抑制します。
ロイコトリエン受容体拮抗薬 アレルギー反応を起こすロイコトリエンという物質の邪魔をします。
β2刺激薬 気管支を囲む平滑筋という筋肉を弛緩させ気管支を広げます。

行っており、午前9時に小児科病棟で受付し、午前9時半〜10時半にかけて負荷食品を摂取します。午後の3時頃まで症状が出ないかを観察し、症状がない場合や症状が出ても落ち着いている場合は午後3時に退院となります。激しい症状が出てしまった場合などは土曜日の午前中まで入院継続となる場合があります(図6)。

外来の場合は木曜日の午後2時から実施しています。診察後、すぐに負荷食品を摂取し、1時間ほど外来待合室で症状が出ないか観察します。症状が出た場合は治療し、症状が出なければ1時間後に確認のための診察を行い帰宅となります。外来負荷試験は、比較的軽症な方や、小

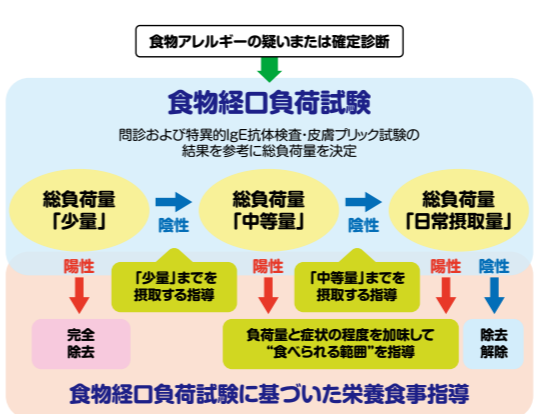


図7 食物経口負荷試験の流れ

なのか、迷われている方もいるかと思えます。喘息には明確な診断基準がないため、喘息「らしい」所見を合わせて診断します。発作時にβ2刺激薬の吸入で喘鳴が改善すること、家族歴や他のアレルギー疾患などアレルギー素因があることなどが喘息らしさとなります。

- 当院では、喘息診断の補助となる各検査を行うこともできます。具体的には、
- ① 血液検査(アレルギー素因の有無の確認)
 - ② 呼吸機能検査(呼吸機能の悪化・喘息性変化の有無の確認)
 - ③ 呼気一酸化窒素の測定(アレルギー性の気道炎症の有無の確認)
- を行っています。②、③の検査は6歳前後から可能です。

アレルギー性鼻炎・結膜炎

発作性反復性のアレルギー性疾患で鼻炎であればくしゃみ(水様性)、鼻水、鼻づまりの症状を、結膜炎であれば、かゆみ、目やに、涙を繰り返すものです。好発時期から通年性と季節性に分かれ、通年性の多くはハウスダストやダニが原因で、季節性のほとんどは杉が原因のいわゆる

学校高学年や中学生で入院の時間が取れない方が対象です。

いずれの負荷試験も少量から開始します。約1か月半〜3か月の間隔で行い、負荷試験ごとに負荷量を増やしていく、最終的には日常的に摂取できるようになることを目標としています(図7)。

気管支喘息

喘息とは気道が狭くなる状態(気道狭窄)を繰り返す疾患で、気道に慢性的な炎症があるために起こります。刺激に過敏となり、炎症が長期間続く場合は気道が硬く厚く変化します(図8)。狭い気道を空気が通るため『ゼーゼー、ヒューヒュー』という雑音(喘鳴)が生じます。気道炎症の原因としては遺伝的な体質が主で、他にアレルギーの多い生活環境や呼吸器ウイルス感染症、受動喫煙などが挙げられます。受動喫煙は成人になってからの慢性閉塞性肺疾患(COPD)のリスクも高くなります。繰り返す症状を抑えるには、気道の炎症を抑えることが重要です。

長期管理として吸入ステロイド薬や経口ロイコトリエン受容体拮抗薬(体内のアレルギー反応を抑え気

花粉症です。

当院では標準的な鼻噴霧ステロイド薬や、抗ヒスタミン薬の内服(アレグラなど)、抗ヒスタミン点眼薬などの他に舌下免疫療法を行っております。

鼻噴霧ステロイド薬や抗ヒスタミン点眼薬は症状を抑える対症療法であり体質を改善したりする作用は期待できません。一方、舌下免疫療法は原因となるアレルギー(杉やダニ)を含有した薬を舌の下に一定時間保持し飲み込むことを毎日繰り返し、アレルギーへの耐性獲得を誘導する治療法です。そのため効果に即効性はなく、長期間の治療が必要になります。8割前後の患者さんで有効性が認められ、治療終了後も効果が持続します。患者さんの中では、3年間の治療終了後に7年間効果が持続したなどの報告があります。またダニの舌下免疫療法では喘息も改善する効果が期待されています。

当院では、アナフィラキシーなどの副作用発現の確認のため初回のみ病院内で投与し1時間の経過観察を行っています。その後は1か月後の受診となり、さらにその後は3か月ごとの受診となります。

対症療法ではなく体質から変えたという方は、ぜひご相談ください。

今号の表紙



本院薬剤室
主任薬剤師
佐藤 渉

薬は治療を行う上で不可欠なものであり、適切に使用することが大切です。私たち薬剤師は薬の専門家として薬の管理や調剤、患者さんや他の医療スタッフへの情報提供を通じて有効で安全な医療に貢献しています。

また、当院では入院中の患者さんへの対応のみならず、入院予定の患者様と入院前に面談を行って使用中の薬の情報を把握したり、外来通院で抗がん剤治療を受ける患者さんの支援などにも力を入れています。さらに円滑な薬の提供や服用・使用の支援ができるよう地域の保険薬局との情報共有も進めています。

新たな薬や治療方法が次々と登場し、最新の情報に基づく最良の治療を提供するためにスタッフ全員が日々研鑽しており、専門資格を有する認定薬剤師も在籍しています。

当院薬剤部の理念である「多様化・専門化する医療の中で患者のもとに薬を安全に提供すること」、「患者が薬を安心して服用・使用して頂けるよう十分な支援をすること」、「地域医療を担う基幹施設としての役割を常に考えその使命を果たすこと」の下、スタッフ一丸となって日々の業務に取り組んでいます。



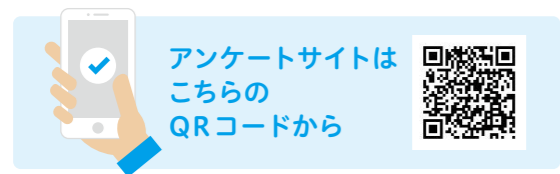
調剤業務の様子

病院広報誌に関する
アンケート調査ご協力をお願い

当院では、病院の医療機能や役割、取組等をご理解いただくため、広報誌「つながり」を発行しています。より読みやすく、分かりやすい誌面づくりの参考にさせていただくため、アンケートを実施していますのでご協力をお願いいたします。

ご不明な点等ありましたら、下記担当までご連絡くださいますようお願いいたします。

なお、これまでのバックナンバーは、当院Webサイト(www.h-osaki.jp)からご覧いただけます。



※ご記入いただきました個人情報は、適切に管理し上記目的以外には使用いたしません

お問い合わせ
経営管理部経営企画課 電話 0229-23-3311 (代表)

専門・認定看護師による **がん相談会**

当院がんサロンにおいて、がん関連の専門・認定看護師によるがん相談会を実施しています。当院がかりつけでなくても、がんに関する疑問や不安をお持ちの方であれば、患者さん、ご家族、どなたでもご利用頂けます。

申込不要 1回 20~30分 相談料無料



開催日 2021年 4月 14日(水)、26日(月)
5月 14日(金)、24日(月)
6月 8日(火)、24日(木)

時間 10:00 ~ 14:00

当日直接がんサロンに来室し、「がん相談会に来ました」とお声がけください。日時は急きょ変更となる可能性がありますので、ご了承ください。不明な点は、がんサロンまでお尋ねください。

がん相談支援センター

お知らせ

アトピー性皮膚炎や食物アレルギー、繰り返す咳や『ゼーゼー・ヒューヒュー』といった呼吸音などでお悩みの方は、まずは、お近くのかかりつけ医にご相談ください。大崎市民病院での検査や治療をご希望の方は、紹介・予約が必要ですので、紹介状をお持ちになってお越しください。検査のみの希望で、治療はかかりつけ医を希望という方もお気軽にご相談ください。

アレルギー外来は毎週火曜日の午前9時半~12時、午後2時~4時で紹介予約制です。症状が安定していれば約3か月に1回程度の通院となります。



小児科病棟のご紹介

当院は、大崎・栗原地域で唯一の小児科医が24時間体制で診療している医療機関です。小児科病棟では、常勤の保育士を配置するなど、高度な医療の提供以外にも、様々なことでお子さんやご家族をサポートできる体制を整えています。

また病棟には、ラウンジ内にプレイルームを設置し、病室の壁紙は部屋ごとに異なったデザインのものを使用しており、入院中の生活を少しでも快適に過ごせるように工夫を凝らしています。



プレイルーム



小児科病棟スタッフステーション



4床室



病室の壁紙

地域の 医療機関のご紹介

Introduction local medical institutions

当院は、身近な医療機関と役割分担を図り、地域全体で切れ目のない医療を提供することを目指しています。
こちらでは、当院の登録医療機関（かかりつけ医）をご紹介します。

わたなべ産婦人科 内科・小児科

〒987-1304
大崎市松山千石字松山 440
TEL: 0229-55-3535
URL: w-keyaki.clinic

診療科目

産婦人科、女性内科、内科、小児科

診療受付時間

【月・火・木・金】
8:50～11:30
14:00～17:00
※週2回（火・金）14:00～15:00は
小児の予防接種の優先時間帯です。

【土】

8:50～11:30

休診日

水曜、日曜、祝日

	月	火	水	木	金	土	日
午前	○	○	—	○	○	○	—
午後	○	○	—	○	○	—	—



地域の皆さんへ

松山高校近くにある、昭和4年開設の診療所です。5年前にリニューアルしました。一般内科・小児科、産婦人科・女性内科の診療をしています。妊婦さんから乳幼児・小児、成人まで幅広く、地域のファミリークリニックとして診療しています。

院内は産婦人科・女性内科と内科・小児科に分かれています。

分娩の取り扱いはありませんが、月経困難症、不妊相談、思春期から更年期の診療、妊婦検診、子宮がん・乳がん検診、日帰り手術、腹腔鏡下手術（他施設にて）等をおこなっています。

乳児健診や小児予防接種に関しては、通常診療時間帯に加え、週2回小児優先時間帯を設けています。

専門性の高い疾患については、大崎市民病院を始めとした専門施設との連携を行っています。詳しくは当院のホームページをご覧ください。

八木小児科医院



地域の皆さんへ

昭和37年に当地区唯一の小児科診療所として前院長が開業して以来、地域のお子さんの診療・健康維持に取り組んできました。平成7年から現院長および内科医師が引き継ぎ現在に至っています。地域の方々が安心して受診することができるよう、職員それぞれが勉強・努力し、質の良い医療と正しい医療情報の提供に努めています。

また COVID19 の院内感染を防ぐため、予防接種・乳児健診専用入り口・待合室・診察室の設置以外にも、症状のある方専用の待合室や院内の空気の流れを考えた換気扇の増設、入室者すべてマスクの着用等々、考えられる対策をすべて実施し診療にあたっています。

〒987-0511

登米市迫町佐沼字西佐沼 125

TEL: 0220-22-2566

URL: www.yagiclinic.or.jp

診療科目

小児科、内科

診療時間

【月・火・木・金】

8:50～12:30

14:00～17:30

【土】

8:50～12:00、14:00～16:00

休診日

水曜、日曜、祝日

	月	火	水	木	金	土	日
午前	○	○	—	○	○	○	—
午後	○	○	—	○	○	○	—

